中国における横井小楠思想の紹介について

陳　衛平

一、中国における日本近世及び幕末思想研究について

中国の日本思想史の研究史を辿って見ると、意外な発見に気づく。それは近代中国人の日本留学の開始と共にスタートしたことである。それはまた中国の後の日本思想史研究の性格を大きく規定することを意味する。梁啓超が行う佐久間象山と吉田松陰の人物紹介は最初の一歩ではないかと思う(1)。そう言えば、もう百年前後の歴史を有するであろう。

以下近年中国（大陸）における日本近世及び幕末日本思想家の紹介及び研究について簡単に紹介しよう(2)。

研究者の数について。王家驊（南開大学）によれば、（一九九二年時点）一五〇名に達しているが、卞崇道（中国社会科学院哲学研究所）によれば、（一九九五年時点）せいぜい三十名前後であろう。いずれにしても、一万人以上の日本研究者を有する中国にとって、日本思想史研究者は僅かであると言ってよかろう。

研究の特色について。中国の日本思想史研究は殆ど日本近世及び幕末日本期の研究と言ってよい(3)。さらに数少ない思想家の紹介及び研究に集中している。安藤昌益に関する研究論文一九九三年だけでも三〇篇以上にのぼる(4)。あとは福沢諭吉に論じるものが多数ある。ここ数年幾分視野が拡大しているが、やはり佐久間象山、吉田松陰など数人にとどまるのは現状である。

もう一つの特色と言えば、近代中日思想の比較研究の盛んである。これはこの数年間中国国内に主な研究成果を見るとすぐ分かるであろう(5)。

二、横井小楠思想の紹介及び研究について

以上の思想家の研究と対照的に、中国における横井小楠思想の紹介が非常に少ないし、しかも本格的研究が始まったばかりという状態にあると思う。

筆者が知っている限り、一九六二年刊行された『日本古学及陽明学』（朱謙之著）は小楠を言及したのが中国最初である。その後小楠に関する紹介、研究論文（訳文を含む）は既発表の

ものが、以下の通りである（年代順。なお中国語論文は入手困難のため簡単な内容紹介を付す）。

1、朱謙之（中国社会科学院哲学研究所）一九六二「横井小楠」『日本古学及陽明学』（同書の一節第三二七―三三〇頁）上海人民出版社。

朱謙之は博学多彩な人である。一九四九年以後中国における日本思想史研究を切り開いた先駆者の存在でもある。上述書において朱謙之は小楠を陽明学者として位置付けた。朱謙之は「小楠儒教の立場は、実用実学に傾き、宋儒の格物と同じではない。」と論じ、さらに「'明堯舜之道、尽西洋器械之術'、という小楠の考え方は、佐久間象山の'東洋道徳西洋芸'、と同じく東西文化の接触期に過渡的思想を代表するものである。だが、小楠の考え方は一種な特色がある。すなわち象山は東洋文化と欧洲おける近代的自然科学を結び付けることに重んじるに対して、小楠は東洋文化と欧洲の政治経済を結び付けることに重じる。」（訳文は筆者）と書いた。六〇年代初頭つまり三五、六年前の研究論文という歴史的事情を考えると、朱謙之の仕事は地道的な研究と言えよう。

（朱謙之の著書は日本東洋文庫所蔵。番号一一一二三）

2、王家驊　一九八八『中日儒学の比較』（東アジアの中の日本シリーズ）六興出版一九八八年。同書中国語版『中日儒学的比較』、浙江人民出版社　一九九〇年[6]。

3、源了圓（訳　王家驊）一九九〇「横井小楠と三代之学」『哲学研究・中国哲学史増刊』（月刊誌）哲学研究雑誌社北京　日本語論文初出は「文部省科学研究費・重点領域研究・東アジア研究」昭和63年・平成元年度科学研究報告書

4、趙健民（復旦大学）一九九二「横井小楠」『日本史辞典・横井小楠条目』（八二九頁）　呉傑主編（＝監修）（上海）復旦大学出版社　一九九二年十月。

5、陳衛平　一九九三「横井小楠思想簡論」『山東社会科学』（隔月刊誌）一九九三年第一号

中国で小楠思想をトータルに紹介したのはこの文章が初めてである。また、論述が不十分だが、小楠の中国観を佐久間象山のそれと比較しながら高く評価した[7]。

6、山崎益吉（高崎経済大学）一九九三「横井小楠の社会経済思想と東亜」（「東亜経済、社会現代化国際討論会」での研究発表）一九九三年四月於北京。論文集『東亜経済、社会現代化』所収　中国山西経済出版社　一九九四年九月。

7、盛邦和（華東師範大学）一九九五「横井小楠の'国是三論'と　其の'制度開国'観」『東亜：走向近代的精神歴程―近三百年中日史学与儒学伝統』所収（第二二八―二三三）浙江人民出版社一九九五年十月。

盛論文は小楠の思想的性格を「制度開国」論者として位置付け、「佐久間象山と比較して、さらに一歩を進んだ。（中略）小楠は西洋の政教制度を学べることを主張し、西洋の議会制度を賞賛した。これは当時の日本において成長しつ

つある市民階層の考えと識見を表わしたものである」と述べた。

三、むすびをかえて

上述したように、中国の小楠研究及び日本思想史研究については決して喜ばしい状態にあるとは言えない。ここでその客観的と主観的原因に簡単に述べる。まず、客観的原因を考えよう。研究者数の僅少と研究資料の極端的な不足、及び最新研究情報の乏しさなどが挙げられる。ただし、これは小楠思想研究だけのことではなく、中国の日本思想と思想家研究全体が直面しているハンディである。したがって、客観的原因で小楠研究の現状について部分的に説明できるが全体的に説明できないであろう。

次に、主観的原因を考えよう。研究方法論の未成立という点をまず挙げられる。

中国の日本思想史研究は基本的に比較研究と言える、しかも殆どは近代に集中している。こういう研究姿勢に筆者はまったく異議ない。自分自身もこの方面にもっと努力しなければならないと思う。だが、中国の比較研究とは、長年の日本思想史研究の蓄積の上に現れてくるではない。一九七八年以降、文革後に日本思想研究が本格的に再開した途端、比較研究がいち早く登場したのである。極端に言えば、日本思想研究あるいは比較思想研究そのものより中国近代思想研究の延長と言った方がよかろう。多くの研究者にとって、中国近代思想を研究するために、一つの参照物として日本近代思想（家）を俎上にのせたのである。また、共通する問題意識は「日本の近代化は成功したが、中国のそれは成功しなかった。その思想的原因とはなぜか」のである。従って、佐久間象山、吉田松陰と福沢諭吉などが頻出したのも当然であろう。小楠のようなやや傍流に見える思想家がそれほど重視していない。上述の問題意識自体がすでに色褪せたものかどうかが別として、日本思想、少なくとも近世思想に関してある程度の予備研究がなしにとうてい真の比較研究にはならないと思う。

小楠思想研究は、小楠研究を含む日本幕末思想研究を前進させるばかりではなく、当時日本儒学界、引いては思想界の中国観の全体像を明らかにするためにも大変役に立つと思う。それが学問研究以上の意味を持つことは言うまでもないであろう[8]。これから中国学界により深みのある研究が展開するようにお祈りする次第である。

註

（1）増田渉、一九七九「日中文化関係の一面」参照、『西洋東漸と中国事情』所収　三十五頁　岩波書店。

（2）王家驊、一九九二「中国における日本思想史研究の現状と問題意識」参照、『中国―社会と文化』第七号、一九九二年六月。

(3) 古代思想に王守華（杭州大学）、現代思想に卞崇道などはきわめて少数な存在だが、多数な研究成果をあげた。主な著書は：鈴木正卞崇道 著『日本近代十大思想家』上海人民出版社一九八九年四月印数三、五〇〇冊。日本語版は『近代日本の哲学者』北樹出版。（因に鷲田小彌太による「幅広い考察を加えた力作」という題名の書評は『読書人週刊』一九九〇年四月九日参照）
王守華 卞崇道 著『日本哲学史教程』山東大学出版社一九八九年五月初版印数 二、〇〇〇冊。
加藤尚武 卞崇道編『当代日本哲学家』社会科学文献出版社一九九二年八月初版 印数一、五〇〇冊。
卞崇道主編（＝監修）『戦後日本哲学思想概論』 中央編訳出版社 一九九六年三月 初版印数五、〇〇〇冊。
鈴木正 王守華編『戦後日本の哲学者』農文協 一九九五年九月 中国語版は同じ題名で一九九六年九月初版。
王守華 著 本間史訳『日本神道思想の現代的意義』農文協一九九七年十一月。

(4)『安藤昌益 日本・中国共同研究』参照、農文協一九九三年十月。中国語版は『安藤昌益・現代・中国』の題名で山東人民出版社一九九三年七月初版。

(5) 王家驊、一九八八『日中儒学の比較』出版元は前出参照。
崔世広、一九八九『中日近代啓蒙思想的比較研究』北京航空航天大学出版社。
王中江、一九九一『厳復与福沢諭吉―中日啓蒙思想比較』河南大学出版社
一九九一年五月初版 印数二、〇〇〇冊。
高力克（寃江大学社会科学系）、一九九二「福沢諭吉与梁啓超近代化思想比較」
『歴史研究』（隔月刊誌）一九九二年第二号 歴史研究雑誌社。
李甦平（中国社会科学院哲学研究所）、一九九二『聖人与武士―中日伝統文化与現代化之比較』中国人民大学出版社一九九二年七月 印数二、五〇〇冊。
なお、台湾の東大図書公司より李甦平の著書二冊を出版。
『朱舜水』一九九三、『石田梅岩』一九九六。
呉潜涛（中国人民大学）、一九九四『日本倫理思想与日本現代化』中国人民大学出版社一九九四年四月初版 印数二、〇〇〇冊。
王中田（南開大学哲学系）、一九九四『江戸時代日本儒学研究』中国社会科学出版社一九九四年一二月初版 印数一、五〇〇冊。
盛邦和（華東師範大学）、一九九五『東亜：走向近代的精神歴程―近三百年中日史 学与儒学伝統』浙江人民出版社一九九五年十月 印数二、〇〇〇冊。

(6)『日中儒学の比較』に関する書評は以下のものがある。
『中国図書』（内山書店）一九九七年九月号。

(7) 拙稿「横井小楠の中国観について」『哲学・思想論集』一九九六年号 筑波大学。

（7）『毎日新聞』一九九七年七月一四日朝刊に作家童門冬二の「小楠と海舟がみた中国」短文を掲載した。評論家風な文章だが、小楠と海舟が当時他の思想家及び政治家と異なる中国観を持つことと指摘した点は興味深い。因みに、童門冬二は『小説横井小楠――維新への道を拓いた巨人』（祥伝社一九九五年）の著書がある。

（ちん・えいへい）